

発表要旨②

教育改革の“リソース”としてのPISA

—その批判的検討—

松下 佳代（京都大学）

はじめに

PISAは、20世紀から21世紀への世紀の変わり目に、世界がグローバル化するなかで、文化や国をこえて身につけるべき能力を指標化し、データを収集・分析して、国家間の比較と政策借用を促進しながら、教育の世界標準を構築する役割を果たしてきた。「PISA リテラシーを飼いなす」（『教育学研究』81巻2号、2014年）という論考において、私は、PISA リテラシーを「飼いなす」（Hacking, 1990）こと、すなわち、その本質を明らかにし、影響をコントロール可能なものにすることを提案した。

本報告では、日本の教育改革において、PISA がさまざまな形で“リソース”として用いられていることを明らかにしながら、批判的検討を加えていきたい。なお、ここでは「リソース」という言葉を、教育改革のアイデアや方法等の供給源という意味で使っている。

1. 学力向上への政策転換

日本の教育へのPISAの影響を、私は「政策転換への直接的影響」と「構造変化への間接的影響」に分けて論じてきた。政策転換とは、PISA2003のもたらした「日本版PISA ショック」により、90年代末から続いていた学力論争に事実上の終止符が打たれ、全国学力・学習状況調査や読解力向上プログラムの導入など、ゆとり教育から学力向上へと政策が転換したことをさす。この政策転換は、PISAの結果への受動的対応としてなされたというより、むしろPISAの結果をうまく活用して行われたとみることができよう。

2. 能力目標の組み込み

一方、構造変化とは、2005年の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」の文言を用いれば、「国の責任によるインプット（目標設定とその実現のための基盤整備）を土台にして、プロセス（実施過程）は市区町村や学校が担い、アウトカム（教育の結果）を国の責任で検証し、質を保証する教育システムへの転換」をさす。「教育改革の“リソース”としてのPISA」というテーマにとってより興味深いのはこちらの方である。

このうち〈目標設定〉については、2007年の学校教育法改正により、「思考力、判断力、表現力」などのPISA リテラシーに類する能力が学校教育の目標に組み込まれ、2008・09年の学習指導要領改訂により教育内容に具体化された。学校教育法（第30条第2項）の学力規定は後に「学力の三要素」と呼ばれるようになり、現在では、高大接続改革を通じて、大学教育にも影響を与えつつある。

さらに、現在進められている大学入試改革でも、PISAの調査問題が、「大学入学希望者学力評価テスト」において「思考力、判断力、表現力」を問う問題のプロトタイプの一つとみなされ、改革の“リソース”として機能している。

3. 検証改善サイクルの構築

構造変化のうち、〈アウトカムの検証〉については、PISA ショックをきっかけに導入された全国学力・学習状況調査を中心に整備がはかられてきた。それによって、PISA が国レベルで促進してきた「エビデンスに基づく検証改善サイクルの構築」が、地方自治体や学校のレベルで具体化されることとなった。「各学校段階における継続的な検証改善サイクルの確立」は第2期教育振興基本計画の基本施策とされており、今後、地方自治体、学校のみならず学習者レベルまで含め、いっそう推進されることになるだろう。

もっとも両者の間には違いもみられる。PISAで開発される指標には、生徒の知識・技能などに関する「基本指標」、その背後にある社会経済的・教育的要因などに関する「背景指標」、および、3年ごとの経年変化から得られる「変化指標」の3つ

がある。これに対し、全国学力・学習状況調査では、問題 A・B が基本指標、質問紙が背景指標を提供するが、変化指標としては質問紙と問題のごく一部（過去調査との同一問題）しかない。そのため、地方自治体や学校間の教育施策・実践の評価は、経年変化ではなく他との比較に依拠せざるをえなくなっているのである。

おわりに

PISA は今や単なるアセスメントではなく、その結果から “strong performers” や “successful reformers” を浮き彫りにし、ベンチマーキングと政策借用によって教育改革を促進する道具となっている。とはいえ、各国の教育改革に対する PISA の影響は一様ではない。高校から大学への接続における「思考力、判断力、表現力」を測定する問題の導入は、論述試験が一般的なヨーロッパでは改革のテーマにはならないし、逆に、教育スタンダードの構築は、すでに学習指導要領をもつ日本では改革のテーマになりにくい。

各国の教育改革は、PISA の能力観、調査方法、結果、検証改善サイクル等を、各国の事情にあわせて再文脈化（選択的な抽出と変容）しながら、改革の “リソース” として用いてきたといえる。変化しつづける PISA の性格と、その再文脈化をとおしての教育改革への活用を批判的に吟味し、別のあり方を提起することが、PISA を「飼いならす」ことにつながるだろう。